東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

# 反革命の闘士フェルセンとスウェーデン革命



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 1997-12-20<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/771 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 反革命の闘士フェルセンとスウェーデン革命

本　間　晴　樹

## はじめに

1810年6月20日，ストックホルムの中心街で白昼，宮内大臣ハンス・アクセル・フォン・フェルセン（Hans Axel von Fersen）伯爵が，激昂した市民の集団により撲殺された。理由は，前月の28日，王太子カール・アウグストを毒殺した，という嫌疑をかけられた為であった。スウェーデンにおいて，前年1809年3月勃発した革命の結果，国王グスタフ4世は位を追われ，その叔父カール13世が王位についていた。老齢で子供のいないカール13世の為に，革命政権が選んだのが，デンマーク王室傍系のアウグステンブルク公爵家のクリスチャン・アウグストであり，彼は1810年1月カール13世の養子に迎えられ，名前をカール・アウグストと改め，スウェーデン国民の人気者となっていた。カール・アウグストが急死すると，革命を阻止し，グスタフ4世一族の復活を図る者達による謀殺である，という風説が急速に広がり，フェルセンはその首謀者ということにされてしまった。その結果，カール・アウグストの葬儀の当日，市民の憤激の前に，フェルセンは斃れたのである。

その後の調査によれば，カール・アウグストの死は全くの病死であり，いかなる陰謀によるものでもなかった。何故フェルセンに嫌疑が集中し，殺害されるに至ったかについては，スウェーデン革命史の流れの中に位置づけて検討されなければならないが，ごく単純に，彼自身の側に原因を求めるとすれば，彼がグスタフ4世一家の支持者であり，またフランス大革命勃発以来の世界的に知られた反革命の戦士である，という世間の評価が最も重要であろう。実際，彼の政治的保守性と革命に対する反感は，疑う余地のないものであった。ルイ16世一家の逃亡事件を初めとする，数々の反革命活動の実績も，周知のものである。しかし，そのフェルセンが，1809年に自国で起こった革命に対しては，何の抵抗も示さず，革命政権に一時名前を連ねてさえいる。永年務めた宮内大臣の職は革命後も維持し続け，その後の革命の進行に対しても全く障害にはなっていなかった。ただ，その事実も，彼が革命の敵として断罪されるのを防ぐ役には立たなかった訳である。

本稿では，フェルセンが何故スウェーデン革命に対して無為に留まったか，そして，何故それにも拘らず，殺害されたかについて，彼を取り巻く諸条件及び彼の全生涯を視野に入れながら，考察する。(1)

## 家系と家族

フェルセン家は，西北ドイツに起源を持つ旧家で，16世紀にエストニア（1561年以降スウェーデン領）に入植し，17世紀にスウェーデンに移って，官僚・軍人貴族として声望を築いて来た。1674年，ハンス・アクセルの高祖父ハンス（1625—83）の代に男爵，1712年，曾祖父レインホルト（1646—1716）の代に伯爵に序せられている。曾祖父及び祖父ハンス（1683—1736）は共に，武官としては陸軍中将にまで昇り，文官としてはスヴェーア高等裁判所長官を務めている。スウェーデンにおいては18世紀の中頃，国王の権力が衰えて，貴族主導の議会の力が極めて優越した時代，いわゆる『自由の時代』（1719—72）が出現するが，祖父ハンスは，その議会における二大政党の一つ，ハット党[(2)]の創立者の一人であった。

ハンス・アクセルの父フレドリク・アクセル（1719—94）は，18世紀のスウェーデン政界における，最も主要な存在の一人である。軍人としてまずフランスで勤務（1739—53）した後，帰国して対プロイセン戦争（1757—62）に参加し，1763年大将，1770年元帥になっている。一方，議会においても1750年代からハット党の領袖として活躍し，1755—56年と1768—69年の議会では，貴族部会の議長を務めている。ハット党の主張は，親仏反露政策と積極的対外策であり，フレドリク・アクセルの活動も，この線に沿ったものであった。同時に彼は，党内でも，王権の強化に反対し，貴族官僚及び貴族的議会による統治を擁護する勢力に属していた。その為，1772年に国王グスタフ３世がクーデターを起こし，議会の権限を抑えて絶対主義的憲法を制定し，専制政治を開始すると，フレドリク・アクセルの立場は急速に弱まる。しかしその後も，彼は反絶対主義的な貴族の間では，実質的な指導者であり続けた。また彼は，国内数箇所に領地と城館を持っている他，鉄鉱山と製鉄所を所有し，更に東インド会社の大株主として，スウェーデン屈指の大富豪でもあった。

フレドリク・アクセルには２男２女が生まれているが，[(3)]ハンス・アクセルは，その第二子かつ長男として，1755年９月４日に誕生した。

## 軍人・廷臣への道

フェルセン（以下で単にこう表記する場合は，ハンス・アクセルを指す）の教育は，当時の上級貴族の習慣に従い，主に外国でなされた。1770年６月にスウェーデンを離れた彼は，ブラウンシュヴァイク，次いでトリノの士官学校に在籍し，73年にはパリを訪れ，ロンドン滞在を経て，74年12月に帰国している。この間に彼が身に付けたのは，軍事に関する専門教育の他，宮廷及び社交界への出入りによる，廷臣としての経験と心得であった。当時まだフランス王太子妃であったマリー・アントワネットと初めてあったのは，74年１月17日のヴェルサイユでの夜会においてであったとされている。この時点では，単に交際が始まったというだけであっ

た。尤も，フェルセンの有名な女性遍歴は，他方面で既に始まっている。この長い旅行中に，大貴族の子弟の特権として，彼はフランス及びスウェーデンの陸軍中尉の地位を，全く勤務することなしに得ている。一方，やはり旅行中の1772年8月，故郷スウェーデンではグスタフ3世によるクーデターがあり，彼の父フレドリク・アクセルが失意の境遇に追いやられるが，それを知った彼が動揺したり，グスタフに反感を抱いた様子はない。彼は，父の推進する貴族的議会政治よりは，絶対王政の方を好むようになっていた。

帰国後のフェルセンは，父の不遇に憚ることもなく，グスタフ3世の宮廷に入り，宮廷社会の人気者になると共に，国王の寵臣の一人ともなった。但し，グスタフが精力的に展開した政治上の諸改革，いわゆる啓蒙専制政治において，彼が何らかの役割を果たした様子はなく，国王の純然たる遊び仲間であったらしい。

78年春，フェルセンは父の商用を名目としてロンドンに向かい，その夏には再びパリ，次いでヴェルサイユに現れる。8月25日にマリー・アントワネットと再会すると，彼は頻繁に彼女を訪ねるようになり，やがてその親密ぶりは，醜聞を引き起こすまでになる。79年，フランス軍の大佐の位を得ていた彼は，スキャンダルを沈静させる為，アメリカに渡る決心をし，翌80年6月漸く大西洋を渡ると，独立戦争に参加した。戦後，グスタフ3世の意を体して83年まで新大陸に留まり，その間，頻繁にスウェーデンとの連絡を取っている。しかしまた，正義の為と称して報酬を辞退して戦った結果，彼は甚だしい手元不如意に陥り，度々の無心で父を悩ませてもいる。83年フランスに戻った彼は，金銭目当ての結婚を企てなどしたが，結局マリー・アントワネットの斡旋により，フランスの王立スウェーデン連隊（Regiment Royal Suédois）[4]の連隊長の職と，2万リーヴルの年俸を手にいれることができた。尤も，この地位を買う為の費用は，父から出させている。

83年10月，ドイツを旅行中であったグスタフ3世は，フェルセンを随行者として呼び寄せた。バイエルンでグスタフ一行と合流したフェルセンは，その後ドイツからイタリア諸国への旅に同行し，84年6－7月ヴェルサイユに滞在した後，一緒にスウェーデンに帰った。一冬を実家で過ごしたフェルセンは，しかし翌85年5月にはまたフランスに現れる。86年秋から87年春にかけても帰郷しているが，彼の生活の場は事実上フランスに移っていた。名目上は，連隊長としての職務の為であるが，その実，彼は既に毎週3－4回はヴェルサイユのマリー・アントワネットを訪ねるという行状により，著しく注目を浴びる身となっていたのである。

## フランス革命の衝撃

1788年春，ロシアとの開戦を決意したグスタフ3世は，フェルセンに帰国を命じて呼び寄せた。対ロシア戦争は6月に開始され，フェルセンはグスタフ3世と共に，フィンランドの前線に赴いた。しかし，戦況は初めから不利で，グスタフ3世は苦境に陥った。加えて，この戦争はグスタフ3世の方から挑発したものである上に，開戦手続きも憲法にかなり反していたの

で，国内，特に貴族の間には，戦争，更にはグスタフの統治に対する反対運動が急速に広がり始めた。9月，デンマークがスウェーデンに対して開戦したのは，グスタフ3世にとって，侵略戦争を防衛戦争にすり替える，絶好のチャンスであった。グスタフ3世は直ちに本国に戻り，グスタフ1世の故事に倣って，ダーラナ地方に乗り込んで，農民と市民に対し，貴族の陰謀を非難すると共に，祖国防衛への協力を訴えた。10月，農民兵の力でデンマーク軍を撃退したグスタフ3世は，貴族の反抗を抑圧する準備にかかるが，この間常にグスタフと行動を共にしていたフェルセンは，任務を離れる許可を得，11月フランスに戻った。数年前から不穏であったフランスの政治情勢が，ますます緊迫したものになっていった為であった。

フランスでは，累積した財政上の危機を打開する為，三部会を召集することが，88年8月に布告されていた。89年2月，三部会の議員選挙が行われると，国民の政治的関心と改革への欲求は著しく高まっていった。しかしこの時期のフェルセンは，事態の重大さを全く理解せず，三部会に期待し，その召集で問題が一切解決するだろうとの予想を述べている。

スウェーデンでは，89年2月，グスタフ3世が再びクーデターを起こし，議会に強制して絶対王政の一層の強化を認めさせた。国王は行政・公職任免・宣戦・講和の全権を一身に帯びることになった。ただ，その代償として議会の財政権と立法承認権は確立され，また，市民・農民の民事上及び議会制度上の権利は拡大された。専ら，貴族への犠牲の皺寄せによって，王権が強化されたのである。この時，反絶対主義勢力のリーダー数人が数日間逮捕・拘禁されたが，その中にはフェルセンの父フレドリク・アクセルも含まれていた。今回もフェルセンは，この知らせに接しても驚きもせず，グスタフの措置を受け入れている。

フランスにおけるその後の政治情況については，周知のことでもあり，類書に譲るとして[5]，フェルセンの行動だけを専ら追ってみる。依然として頻繁にヴェルサイユに出没していた彼も，社会不安の広がりに伴い，連隊を余り離れる訳にいかなくなり，バスティーユ襲撃のあった7月14日にも，連隊の衛戍地であるヴァランシェンヌにいた。10月5日，パリの主婦達のヴェルサイユ進軍が始まった時，パリ市内の自宅にいた彼は，直ちに馬を飛ばしてヴェルサイユに駆けつけるが，ヴェルサイユでの彼の行動は不明である。ただ，翌朝，彼が王妃の寝室にいたという証言がある[6]。一方，この時期の彼は，別の愛人との関係に深入りし始めている[7]。

フェルセンのフランス滞在は，この頃から，公的な性格を帯びてきていた。改革者と呼ばれながら，国民による革命を嫌悪したグスタフ3世は，84年以来のフランス駐在スウェーデン大使スタール・フォン・ホルシュタイン男爵[8]が，革命に好意的であるのに不満で，フェルセンに非公式の使節及び諜報員・工作員としての働きを求めていたのである。

ルイ16世一家の逃亡計画は，90年夏頃から何度か企てられていたが，91年春になると，急速に具体化し始める。フェルセンも勿論荷担したが，それは彼自身の意志によると同時に，グスタフ3世の意を体してのことでもあった。グスタフは，国際的な反革命活動の指揮をとるべく，91年5月アーヘンに乗り込み，各国にフランスに対する干渉を呼び掛け，また，ルイ16世

の国外脱出を慫慂していた。フェルセンが引き受けたのは，資金の調達と馬車の手配であった。彼は自己資金の他に，愛人達から借り出した金も注ぎ込んでいる[9]。6月20—21日の深夜，王室一家と共にパリを脱出した彼は，ルイ16世の求めに従って途中から別行動を取り，22日にはベルギーに無事逃げ込んだ。ルイ16世と一行がヴァレンヌで捕らえられたのを知ったのは，24日のことであった。

## 反革命闘争への没入

1791年6月29日，アーヘンについたフェルセンから，逃亡計画の失敗について報告を受けたグスタフ3世は，改めて各国の君主に対し，共同してフランス政府への圧力をかけるよう訴えたが，捗々しい反応はなかった。そこで8月，フェルセンはウィーンに派遣され，オーストリア宮廷に働きかけたが，やはり殆ど成果はなかった。グスタフは，諦めた訳ではないが，9月にアーヘンを去って帰国する。その後主にブリュッセルで暮らしていたフェルセンは，92年2月，ポルトガルへ行く外交官を装って，パリへの潜入に成功した。2月13日の夜，彼はマリー・アントワネットと再会することができたが，脱出計画等は問題にならなかった。彼も，既にフランス軍の脱走兵として追われる身であり，2月末には，空しくブリュッセルに戻ることになった。

92年3月16日，グスタフ3世は仮面舞踏会の最中に，反絶対主義派の貴族の手で狙撃され，その傷により29日に死んだ。彼の13才の息子がグスタフ4世として即位し，その叔父セーデルマンランド公カールが摂政として，政務を執ることになった。フェルセンの秘密の任務は，継続されることになったが，新政権はフランス革命への介入には消極的になった。皮肉なことに，フランスに対する国外からの干渉はこの頃から活発化し，4月20日には，フランスとオーストリア・プロイセン両国との間に，戦争が勃発した。普・墺連合軍の勝利を疑っていなかったフェルセンは，ルイ16世夫妻の安全だけを憂慮し，フランス国民を威嚇することを考えた。7月28日，彼の起草した宣言が[10]，プロイセン軍総司令官ブラウンシュヴァイク公の名前の下に，パリで公表された。それは，連合軍に抵抗するフランス人を死を以て罰し，国王夫妻に危害が加えられれば，パリ全市を破壊する，という内容であった。これはフランス国民を刺激し，8月10日のテュイルリー宮殿襲撃，王政廃止から9月21日の共和政開始へと，事態を進めることになる。

93年1月にルイ16世が処刑された後，フェルセンはマリー・アントワネットの救出を図って狂奔し，デュムーリエの寝返りに過大な期待を寄せたり，精鋭の騎兵隊によるパリ突入を企てたり，果てはフランス政府から彼女の身柄を買い取ることまで考えた。10月，彼女が処刑されると，彼は日記に絶望と悲嘆の言葉を並べ立てている。しかし，愛人との生活は変わらず続いている。

94年5月，前月に父フレドリク・アクセルが死んだとの知らせが入り，併せて，非公式使節

の任を解くとの通知も届いた。スウェーデンは，フランス革命戦争に対しては，表向きは中立の立場を守っていて，フェルセンの活動はかなりそこから逸脱していたのである。6月，フランス軍がブリュッセルに迫ると，フランスからの亡命者達は続々と避難し始めた。フェルセンも逃げざるを得ず，しばらく西部ドイツに留まったが，結局10月には，スウェーデンに帰ることになった。

## 国際的活動の挫折

6年ぶりに戻ったストックホルムの宮廷は，フェルセンの目には，優雅さを失って粗野になったように見え，居心地の良いところではなかった。摂政のカールが，時折気紛れに国政改革に興味を動かし，フランスとの接近を図るのも，フェルセンには気に入らなかった。カールの妻のヘドヴィク・シャルロッタとは，かなり親密な関係になることができたが，カールとの関係は，最後まで好転することはなかった。帰国後1年に満たない95年7月，彼は再びヨーロッパ大陸に渡り，革命に対する闘争に戻ることになった。同時に経済上の問題の処理にもとりかかった。即ち，ヴァレンヌ事件を含め，ルイ16世一家の逃亡計画の為に，フェルセンが使った費用は，他人から借りた額も含め，およそ150万リーヴルに達していた。これに対し，ルイ16世夫妻は連名の借用証を書いてフェルセンに渡していたので，彼は，この金を支払うよう，以前からハプスブルク家やオーストリア宮廷の関係者に要求していた。オーストリア側は，元より関知しないとして取り合わずにいた。彼はこの件を，改めて持ち出したが，それは債権者である元の愛人達が，経済的に苦境に陥っていた為と，国王の約束の神聖さに対する，甚だ楽天的な信頼からであった。しかし，この請求権の正当性は大いに疑問視され，彼の行動は，諸方面で顰蹙を買うことになった。

95年12月，ルイ16世の娘のマリー・テレーズが，捕虜交換によりフランスを出国し，オーストリア皇帝の元に引き取られることになった。フェルセンは，彼女にあうために96年1月ウィーンに駆けつけたが，面会する機会はなかなか得られなかった。オーストリア側の方針として，彼女が亡命貴族その他の諸勢力に利用されたり，言質を取られたりするのを防ぐ為であり，また，フェルセンに関しては，会えば，返せる訳のない借金のことを持ち出すのが，明らかであったからである。結局，3月中に2回だけ会うことができたが，2回とも他人を混えてであり，雑談だけで終わってしまった。なお，マリー・テレーズの側からは，フェルセンは革命政府以上に親の仇であり，全く気を許してはいなかった。金銭問題については，5月に，オーストリア皇帝が債権者の夫人達に対する謝礼として，金貨1000ドゥカーテンを支払うという形で，強引に決着させられてしまった。フェルセンは，深い失望を抱いて，フランクフルトへと戻った。

11月1日，スウェーデン国王グスタフ4世は18才に達し，親政を開始することになり，摂政カールは引退に追いやられた。父親に倣って，革命に対する激しい敵意を抱いている国王の権

力掌握は，フェルセンにとって情況の好転を意味するかに見えた。その頃，勝利者フランスの意向に従い，神聖ローマ帝国を再編成する為，関係諸国の国際会議が西南ドイツのラシュタットで開かれることになり，スウェーデンも参加することになったが，その代表に任じられたのは，フェルセンであった。ラシュタットに着いたフェルセンは，11月28日，フランス代表団の一人ナポレオン・ボナパルトと会見するが，ナポレオンは彼をフランス軍の脱走兵と呼び，過去のフランスでの行状から，代表としては不適当であると指摘した。フランス側が強硬なので，結局98年3月にフェルセンは代表の座を降りざるを得ず，彼の面子を立てる為，バーデン大公国駐在大使の地位が与えられた。これは閑職であり，フェルセンは在職中，専らバーデン宮廷の社交生活に混じり，大公夫人と親しく交際をしたりして過ごした。99年3月，彼はバーデンから離任することになり，ボヘミアのカールスバード温泉にしばらく滞在した後，10月にスウェーデンに帰った。

## スウェーデンの高官として

かつての父の寵臣の帰国を，グスタフ4世は歓迎して側近に加え，99年12月，彼にウプサラ大学総長[11]への就任を命じた。当時，スウェーデンにおいても，多年にわたる専制統治と，経済危機により，革命を目指す動きは広がっていて，特に大学はその中心であったので，それを封殺することを，彼は期待されたのである。赴任すると，彼はウプサラの町に軍隊を配置して学生運動を取り締まり，学内の急進的団体を解散させ，政府に対する批判を封じた。グスタフ4世の統治開始以来，スウェーデンでは新聞・雑誌の発行と演劇はすべて事前許可制となっていて，やがて1803年には書籍の輸入が厳重に制限され，1807年にはオペラ座の閉鎖が命じられるに至るが，フェルセンも，こうした文化抑圧政策の一環を担っていた。1800年3月，財政難解消と戴冠式実施の為，グスタフ4世は不承不承，治世で最初の議会を開いた。そこは忽ち政府に対する批判百出の場となり，特に貴族部会の急進派（通称『ジャコバン派ja-kobiner』）は，政府を痛烈に攻撃した。グスタフ4世は，急進派の指導者達に激しい弾圧を加え，6月に解散を命じると，治世中二度と議会を開こうとはしなかった。

1801年7月，フェルセンは宮内大臣[12]に任ぜられた。宰相になるという噂が流れ，本人もその気になっていただけに，彼はこの任命に不満を示した。しかし，宮廷の儀礼や社交は彼の最も得意な分野なので，結局は引き受けることになった。この少し前から，彼のグスタフ4世に対する評価は厳しくなり，その独善性や頑迷さ，また宮廷の雰囲気の悪さについて，しばしば日記に漏らすようになっている[13]。

1803年7月グスタフ4世夫妻は，王妃フレドリカの故郷であるバーデンへと旅立ち，帰って来たのは1805年2月のことであった。フェルセンは王子・王女の世話をするためにストックホルムに残った。グスタフ4世は，旅行中にも代理や摂政を置かず，政治上の決定はやはり自身で直接行って，本国の政府には命令を実行させるだけであった。彼は，バーデン滞在中の1804

年3月，フランスとの国交断絶を決定し，12月にはイギリスとの軍事協定を結んでいる。

グスタフ3世没後のフランスとスウェーデンの関係は，両国の政情不安定の為，接近と離反を繰り返していたが，軍事的には，スウェーデンは1794年以来，フランス革命戦争に対し中立を堅持していた。しかし，イギリスやロシアからは中立を脅かす圧力が頻りにかかり，またグスタフ4世自身は，革命とナポレオンに対する激しい憎悪から，むしろ戦争に加わるのを望んでいた。1805年3月にはロシアとの軍事協定が成立し，スウェーデンは第三次対仏大同盟の構成国となって，1805年8月にナポレオンが軍事行動を起こすと，10月31日，対仏宣戦布告を行っている。スウェーデンの政府や軍の幹部の大半は，財政難と戦備の不足から開戦に反対であり，フェルセンも，革命に対する敵意こそグスタフ4世と共有していたが，戦争への突入には賛成できなかった。しかし，宣戦・講和権を国王が独占している制度の下では，グスタフ4世を阻むことは誰にもできなかった。

## 戦争と絶対主義の危機

1805年5月，グスタフ4世は開戦に備えて，軍と共に南部スウェーデンのスコーネに移り，11月，北ドイツのスウェーデン領ポンメルンに進出した。フェルセンも，これに同行していた。彼の国外での経験と対人関係の広さから，外交担当のスタッフとなることを，期待されていたのであった。スウェーデンの乏しい経済力と軍事力を顧みることなく，グスタフ4世は，対ナポレオン戦争においてイニシァティヴを握るつもりであった。しかし，スウェーデン軍が一戦も交えないうちに，12月，オーストリア軍は敗退し，対仏同盟から脱落した。1806年初め，グスタフは西北ドイツの一角ラウエンブルク公国を占領し，イギリス及びプロイセンとの間に，紛争を引き起こした。軍人・官僚の間に，グスタフ4世の政策を危ぶむ者は次第に多くなり，フェルセンもその側に傾いていった。1806年6月，グスタフ4世は，王妃の世話を名目として，フェルセンを本国に帰した。つまり，彼はグスタフ4世の本営から，不要として排除されたのであった。ストックホルムに帰った彼は，宮廷の留守を守る仕事に就いた。

間もなく戦局は急展開し，10月14日プロイセン軍は大敗を喫し，フランス軍はそれを追って，北ドイツにまで攻め寄せて来た。ラウエンブルクのスウェーデン軍は，降伏するか潰走し，ポンメルンの大半はフランス軍の占領下に置かれた。グスタフ4世は，シュトラールズントとリューゲン島に兵力を集中して抵抗を続けたが，1807年7月，ロシアとプロイセンがフランスとの講和に追い込まれると，スウェーデンは孤立し，9月までに全ポンメルンを失った。1808年2月，フランスと同盟したロシアが，フィンランドへの攻撃を開始すると，フィンランド駐屯のスウェーデン軍は忽ち敗退し，ロシア軍は困難もなく侵入して来た。6月，グスタフ4世はオーランド島に乗り込み，ロシアに対する反撃の指揮を取ったが，さしたる効果もなく，年末には，フィンランド全土はロシアの占領するところとなった。既に財政は破綻し，兵力動員も限界に来ているにも拘らず，グスタフ4世はイギリスからの援助を頼りにして，更に

戦いを続けるつもりでいた。しかし，財政部門を中心とする政府官僚の間では，戦争継続に対する反対が拡大し，1809年が明けると，国王に対する不服従の動きも生じ始めた。その傾向は，軍中枢においても同様であり，更に，フィンランドでの戦いに際して，グスタフ4世の示した統率ぶりは，将兵の中に非常な不満を引き起こすことになり，国王の暗殺，或いは誘拐の計画さえ立てられるに至った。

この間，グスタフ4世の家族は，ストックホルムの西方にあるグリップスホルム，或いは北のハーガの離宮で暮らすことが多く，グスタフ4世自身も，戦場に臨んでいないときは，これらの離宮に住み，政務の必要に応じてストックホルムに出向くのが常であった。こうした振舞いは，首都の市民や官僚と国王の間の溝を一層広げることになった。フェルセンは，専ら離宮において国王の家族の世話に当たり，軍事にも政治にも，殆ど関わることはなくなっていた。

## スウェーデンにおける革命

1809年3月6日から7日にかけての夜，ノルウェー国境に近いカールスタットの町で，数千の兵士が，戦争終結・財政再建・議会召集等をスローガンに掲げて蜂起した。指導者のアドレルスパレ（Adlersparre）中佐は，1800年議会で急進派として活動した一人であった。この蜂起部隊は，9日にストックホルムに向かって進撃を開始し，途中で阻まれることもなく，次第に勢力を増しながら進んで来た。12日に至って，蜂起に関する確実な情報を得たグスタフ4世は，直ちにハーガからストックホルムに来ると，もはや首都の軍隊の忠誠心が頼りにならないのを見て取って，一旦南部に移ってスコーネの軍隊と合流して，反撃に転じる策を考えた。そこで，彼は国立銀行の現金を携え政府要人達も連れて，ストックホルムから逃げ出す準備にかかり，ハーガにいるフェルセンにも，王妃・王子・王女と共に脱出する用意を命じた。この逃亡計画を知ったアドレルクレイツ（Adlercreutz）少将等6人の軍幹部は，13日早朝王宮を訪れ，グスタフ4世に対し，逃亡をやめ，議会を召集するよう求め，拒否されると彼を逮捕拘禁し，彼の叔父のカールを摂政に擁立した。グスタフ4世はまずドロットニングホルム，次いでグリップスホルム離宮に軟禁されることになり，摂政カールは，直ちに臨時政府を組織し，翌14日には議会の召集を布告した。臨時政府のメンバーは，専らこの時点での政府と軍の幹部で占められていて，グスタフ4世の孤立振りを示していた。

以上の進行中，フェルセンはハーガにいて，事態を全く静観していた。彼は臨時政府に加えられ，そのまま宮内大臣・ウプサラ大学総長・陸軍中将の地位を保ち続けた。13日のクーデターを実行したアドレルクレイツ等は，急進派とは一線を画し，グスタフ4世の戦争政策に反対であったに過ぎず，絶対主義体制を覆そうとまでは考えていなかった。グスタフ4世の後継者にも，その息子のグスタフ王子を予定していて，この点ではフェルセンとも全く一致していた。しかし，アドレルスパレ以下の急進派は，その程度の変革で済ませるつもりはなかった。また，グスタフ4世の失脚と共に，言論・出版に対する長年の抑圧が解かれると，国民の間か

らの改革への要求も，押し止め難い勢いで盛り上がって来た。23日，アドレルスパレ等の蜂起部隊がストックホルムに着くと，臨時政府は急進的なものに改組され，新憲法起草の為の作業も開始された。グスタフ４世は29日，息子に王位を譲る為に退位を宣言したが，世論も政府もそれを無視した。５月１日に開かれた議会は，まずグスタフ４世の廃位と，その子孫の王位からの排除を決議した。次いで憲法審議が行われ，６月６日，新憲法が採択された。それは，なお国王に強大な権力を残しているとはいえ，議会の権限を確立し，また初めて人権保護の規定を盛り込んだ，近代的憲法であった。翌７日，摂政カールは議会により国王に推戴され，カール13世となった。カール13世は，直ちに新憲法に基づく新政府（内閣）を作ったが，その人選には，フェルセンは漏れていた。しかし，彼は依然として宮内大臣・ウプサラ大学総長であり，また位を大将に進められた。

新政府は，最優先課題である戦争終結に取組み，９月17日，フィンランドの譲渡を受入れ，ロシアと講和を結んだ。1810年１月には，フランスとも講和が成立した。

## 嫌疑の発生から殺害まで

カール13世は即位の時点で既に60才で，子供がいなかったので，その後継者を決めることも，政府にとって緊急の課題であった。甥のグスタフ４世と不和であったカール13世は，反面その息子のグスタフ王子を気に入っていて，これを後継者にしたい意向であった。しかし，それは1809年５月の議会決議に対する違反であり，またグスタフ４世の影響力の復活を恐れる急進派には，到底受け入れられないものであった。６月にグスタフ４世と再会した王妃・王子・王女達は，12月，一家揃ってドイツへと退去する。しかし，革命そのものに反対の者，或いは革命のいずれかの段階で不満を抱いた者達の間には，グスタフ王子の復帰と即位を望む動きが生まれ，彼等は『グスタフ派』と呼ばれ，革命を脅かす勢力と目されるようになった。フェルセンは，いかなる政治的な動きにも関係していた様子はないが，グスタフ王子を支持しているのは明らかであったので，勢い，グスタフ派と見なされるようになった。

新政府が見つけた王位継承者候補は，デンマーク王家の分家アウグステンブルク公爵家のクリスチャン・アウグストであった。彼はノルウェー総督として，カールスタット蜂起に密かに支持を与えていたので，アドレルスパレ一派の強い推薦を受けていた。クリスチャン・アウグストは招きに応じ，1810年初めスウェーデンに来てカール13世の養子となり，名前もカール・アウグストと改めた。彼は小柄で小太りで余り風采は上がらず，41才でまだ独身であったが，一般国民の間では広く人気を獲得した。彼の妃を捜す為，ナポレオンとの間に交渉も始められた。しかし，５月28日，スコーネのクヴィーデインゲにおいて，閲兵の最中，カール・アウグストは突然馬から落ち，そのまま息を引き取った。医者の診断では，明白に卒中の発作であったが，国民の間には，毒殺だという噂が，急速に広がっていった。死に方が，余りに突然で劇的であった為もあり，また，一旦安定したと思われた政治情況が，再び動揺するかも知れない

という不安のせいもあった。嫌疑を受けたのは，グスタフ派の著名人であり，とりわけ，フェルセンとその妹の，ソフィー・ピーペル伯爵夫人であった。6月になると，急進派の新聞には，名指しではないが，フェルセン兄妹を犯人と示唆するような記事が現れた。ストックホルムで，6月20日にと予定された葬儀において，フェルセンは宮内大臣として運営の任に当たるはずであった。それに先立ち，彼に式に出ないようにと忠告する者もあり，また彼を責める脅迫状も，多数送られてきていた。しかし，彼は意に介せず，式に臨むことにした。カール・アウグストの柩は，ストックホルムの南西のリリエホルメンから，3km以上の道筋を辿って，王宮に運ばれ，そこで葬儀が行われるはずであった。カール13世は，この日，ハーガの離宮に留まっていて，閣僚達もハーガに召集されていて，葬儀には顔を見せなかったので，専ら宮廷関係者が式の進行に当たった。柩の通る沿道には，朝から多数の市民が集まっていた。正午に葬送の行列が出発すると，柩のすぐ前を進むフェルセンの馬車には，盛んな罵声が浴びせられ，要所要所に配置されていた警備の軍隊にも，制止し切れなかった。市の中心に近付くにつれて，罵声に投石が加わるようになった。王宮まであと300m足らずの所まで来ると，雑踏と投石は更に激しくなり，行列の進行は遅れだし，ついには停止してしまった。フェルセンは，急遽近くの建物に逃げ込んだが，その中にまで激昂した人々が侵入して来たので，駆けつけた警備司令官シルヴェルスパレ（Silfversparre）少将は，取り敢えず彼を殺人容疑で逮捕することにして，その場を鎮めた。ところが，シルヴェルスパレがフェルセンを安全な場所へ移そうとその建物から連れ出すと，忽ちまた群衆に取り囲まれてしまい，フェルセンは間もなく街頭で，大勢に殴打されて息絶えた。群衆は，その後市の中心街を荒れ狂い，何人かの高官の屋敷に投石を繰り返したが，その夜，本格的に動員された軍隊によって，漸く取り鎮められた。フェルセンを別にして，少なくとも8人の市民が死亡し，200人余りが負傷した。軍隊の側も，50人の負傷者を出している[14]。

カール・アウグストの死に関しては，1810年12月に裁判所が病死と判断を下し，フェルセンは汚名を晴らされ，高官としての葬儀を許された。一方，暴行に加わった者達については，約2000人が取り調べを受け，約650人が起訴され，ほぼ1811年秋までに判決が下った。最も重い刑として，3人が終身要塞禁固刑を言い渡されている他[15]，残りは殆ど軽罪で済んでいる。また，王位継承者候補は，一時はカール・アウグストの兄フレドリク・クリスチャンに決まりかけたが，8月に至り，フランスの将軍ベルナドット（Bernadotte）元帥が選ばれ，11月にスウェーデンに迎えられている。

## おわりに

フェルセンの反革命活動は，皮肉なことに，専ら失敗と，味方への迷惑においてのみ知られている。マリー・アントワネットとの醜聞は，王室の面目を著しく損ね，杜撰な計画による逃亡事件は，国王と国民の関係に大打撃を与え，ブラウンシュヴァイクの名を借りた脅迫宣言で

は，王政そのものを破壊してしまった。更にその後の金銭請求の一件では，反革命陣営に不和をもたらし，彼自身への信用をも失わせることになった。元々必要な能力に欠けている彼が，一見重要な役割に身を置くことができたのは，彼の出自・地位・財力・容貌等に加えて，ルイ16世夫妻の愛顧，それにとりわけグスタフ3世の信任があればこそであった。

フェルセンの政治的実体は，空疎の一語に尽きる。フェルセンにとって，あるべき唯一の政治の姿は，貴族と結んだ絶対王政，即ちグスタフ3世が1772年に生み出した体制であった。啓蒙的改革者として知られるグスタフ3世は，一面では貴族社会と貴族的ロココ文化の支持者であり，彼のいわゆる「改革」にも，身分制度や貴族特権を傷つけるようなものは，1780年代後半まではなかった。尤も，彼も治世の末期には，こうした政治のもたらす矛盾に直面し，国内ではむしろ市民・農民の支持に依存し，専ら貴族に犠牲を転嫁することで，絶対王政を維持しようとして，その結果貴族に暗殺される。しかし，そのような方向転換に，フェルセンは全く関心を持たなかった。彼はただ，青年の日の理想像たる貴族的絶対王政を，他国であるフランスにおいてさえ，ひたすら追及するのみであった。

フェルセンが，初めのうちは期待を寄せ，献身的に仕えたグスタフ4世から，次第に離れていったのも，突き詰めていえば，その絶対主義統治が貴族と余り協調的でない為であった。その宮廷も優雅ではなく，フェルセンから見れば官僚的・軍隊的というべきものであった。しかも，フランスとの戦いは，そうした傾向を更に助長していくばかりであった。スウェーデンで革命が起こるまでの間に，フェルセンにとって，革命と戦ってまで守るべきものは，眼前から消えつつあったのである。

フェルセンの殺害に至る暴動事件は，突発したのではなく計画的に起こされた，という疑いは，以前からあった。即ち，王位継承者の死という緊急事態に直面して，当時の政府が反対勢力を威嚇して動きを封じる為，市民を煽動して，グスタフ派の中心と目されているフェルセンを襲撃させた，というのである。マスコミによるフェルセンへの執拗な攻撃が行われたこと，当日，国王も閣僚も葬儀に参加しなかったこと，警備の軍隊が，殆ど彼を守ろうとしなかったこと等，事実，疑わしい点は多い。しかし一方，群衆が襲おうとしたのはフェルセンだけでなく，他の高官・閣僚も目標にされていた。また，その日の夜以後政府がとった厳戒体制は，やはり狼狽と恐怖の現れであるように見える。暴動参加者のうち，身元が判明している者についていえば，30才以上の者が半分を占め，職業でも商人・職人・事務員等が多く，最下層の貧窮民・日雇い等は決して多くなかった[16]。煽動に乗ったというより，彼等なりに革命の将来を憂え，反革命の危険を感じての行動と見て，そう間違ってはいないだろう。かねてからフェルセンと不仲であったカール13世と政府閣僚が，不穏な情況を敢えて放置したあたりに，未必の故意らしいものがあった可能性はあるが。

現実のフェルセンは，1810年の時点において，スウェーデン革命に対する何等の障害でもなくなっていた。にも拘らず，彼の過去の業績と名声は，彼を反革命の象徴として，市民の憎悪を集めさせた。1789年以来過去と虚名のみに生きたフェルセンにとって，避け難く，またふさ

わしい最期であったかもしれない。

（本学教授＝歴史学担当）

## 〈註〉

（1）スウェーデン革命とフェルセンとの関わりについての，代表的な研究成果としては，以下の3著がある。

Ture Nerman, *Fersenska mordet*. 1933.

Rune Hedman, "Massan vid det s. k. fersenska upploppet" *Historisk tidskrift*. 1969.

Gardar Sahlberg, *Fersenska mordet, hur det hända*? 1974.

本稿では，専ら上の2著を使用した。他に，文献として参考にしたのは，主に次の2著である。

Alma söderhjelm, *Axel von Fersens dagbok* (4vols). 1925-36.

Herman Lindqvist, *Axel von Fersen*. 1993.

（2）ハット党（Hattarna）に対するもう一方の政党は，メッサ党（Mössorna）と呼ばれ，親露政策・国際協調主義を主張していた。

（3）ハンス・アクセルの兄弟姉妹は，姉ヘドヴィク・エレオノラ（Hedvig Eleonora 1753-92：後クリンコウストレーム Klinckowström 男爵夫人），妹ソフィー（Sophie 1757-1816：後のピーペル Piper 伯爵夫人），弟ファビアン（Fabian 1762-1818）からなっている。このうちソフィーは彼が最も心を許し，最も頻繁に手紙を交わした相手である。

（4）17世紀の戦争に際して，大陸に出征したまま帰国の機会を失ったスウェーデン兵を集めて編成された。後に近衛部隊となり，その将校は総てスウェーデン人，兵士は主にスウェーデン領ポンメルンの出身者等のドイツ人傭兵からなっていた。

（5）例えば，以下の文献を参照。

桑原武夫編『フランス革命の研究』岩波書店 1959

J. ミシュレ（桑原武夫他訳）『フランス革命史』中央公論社 1968

J. ゴデショ（瓜生洋一他訳）『フランス革命年代記』日本評論社 1989

（6）証言者はナポレオン，カンパン夫人，及び当時の近衛兵。cf. Lindqvist, op. cit. p. 89.

（7）この女性はエリナー・サリヴァン（Eleonor Sullivan 1750-？）といって，元はイタリアのサーカス芸人の出身であったが，様々な遍歴を重ねた後，サリヴァンというアイルランド人の豪商の妻となり，後に夫の知人である豪商クィンティン・クロフォード（Quintin Crawford）の愛人となり，共にパリに住み着いていた。クロフォードは当時，パリでイギリスの為の諜報活動に従事していたので，フェルセンが彼と接触した結果，エリナーとの関係も生じたようである。その後，パリでは勿論，亡命先であるブリュッセル，フランクフルト等においても，二人の関係は続いた。しかし，クロフォードもなお彼女に執着していた為，面倒な三角関係が生じ，フェルセンをしばしば苦境に追い込んだ。二人の関係は1799年まで続いて縁が切れ，エリナーは1802年にクロフォードと正式に再婚している。

(8) Erik Magnus Stael von Holstein (1749-1802) スウェーデンの貴族。1778年以後パリに在住し，83年フランス駐在大使に就任。86年フランス財務総監ネッケルの娘ジェルメーヌ (Germaine Necker 1766-1817) と結婚。フランス革命が始まると，革命に好意的な態度の為，グスタフ3世の不興を買い，92年召還されるが，グスタフ3世の死後再赴任。その後も，本国の政策の変化の度に地位が動揺するが，99年最終的に退職。パリで没。

彼の妻ジェルメーヌは，文筆家として著名なスタール夫人。なお，フェルセンは83年頃，財産目当てで彼女との結婚を目論むが，失敗に終わっている。

(9) 資金を提供したのは，エリナーの他，ロシアの銀行家の妻ステーゲルマン (Stegelman) 夫人，その娘で彼の元愛人のコルフ (Korff) 男爵夫人等であった。

(10) この宣言の起草者は，新聞記者のマレ・デュ・パン (Mallet du Pan)，或いはリモン (Limon) 侯爵と言われているが，フェルセンが大幅に関与しているのは間違いなく，彼の日記にもそのことが記されている。cf. Söderhjelm, op. cit. vol. 1, pp. 216-7.

(11) 当時のウプサラ大学では，学長 (rektor) が教員の互選で選ばれ，任期が半年だった (19世紀中頃から1年) のに対し，総長 (kansler) は国王の任命により，任期の定めはなく，王族か大貴族から選ばれるのが常であり，フェルセンの前任者はグスタフ4世自身であった。

(12) 我国の文献において，フェルセンはしばしば「元帥」と記されているが，これは宮内大臣 (riksmarskalk) と元帥 (fältmarskalk) の職名が，混同された結果ではないかと思われる。実際には，フェルセンの武官としての最高位は，後述のように大将であり，元帥になったことはない。なお，彼が少将になったのは1792年，中将になったのは1802年である。

(13) cf. Lindqvist, op. cit. p. 204.

(14) cf. Hedman, op. cit. pp. 22-23.

(15) 商人レクソウ (Johan Gottlieb Lexow：37才) が煽動，元下士官タンデフェルト (Otto Johan Tandefeldt：28才)，差配人レーヴグレン (Carl Fredrik Löfgren：24才) の2人が暴行により，終身刑を受けているが，いずれも数年後に減刑されている。cf. Nerman, op. cit. pp. 284-313.

(16) cf. Hedman, op. cit. pp. 33-58.